

毛の米軍陣地の攻撃に大宜味出身のメンバーも出て行くことになりました。爆破は一斉にやるといふことで、米兵のいる幕舎、弾薬、食糧庫と攻撃目的ごとに分かれたそうです。平良さんは戦車爆破任務を命じられ、3人一組で、夜中に万座毛に向かいます。平良さんは弾薬にマッチで火をつける弾薬手として行動し、戦車の通過地点に仕掛けたものの、不発に終わりました。2人とはぐれ、夜明け前に何とか戻らなければと、米軍の照明弾が飛びかう中、本隊に戻ることはできませんでした。

### 行軍は 鉄砲杖に水の中 足はただれし 谷間づたいに

米軍の攻撃が激しくなり、護郷隊の食糧も底をつく中、第二護郷隊岩波隊長は恩納岳からの撤退を決定し、部隊は国頭へ移動を開始します。赤痢にかかった顔見知りの隊員が恩納岳の沢のせせらぎに、拭くのが面倒くさいとズボンを脱いで、お尻をつけて座っていた状況を目の当たりにします。一緒に帰ろうとうながしても「もう、おしまいだからいいよ。あんたがたは帰ってくれ。私は放っておいてくれ」とその場を動きませんでした。

恩納村から大宜味村まで何日もかかって移動しますが、平良さんの足は同じ靴下を履き続けた上に不衛生の中、ただれ、半ば腐っている状況になっていました。鉄砲を杖にして何とか故郷の近くまでたどり着き、家族に会うことができました。

家族に会えた平良さんに、さらなる苦難が待っていました。



山深い恩納岳に作られた兵舎

### 痩せ細り やっと辿るや 驚きに 家族と抱き合い 号泣の涙

戦闘中から移動までの間、ほとんど何も食べられず飢餓の状況にあった平良さんに家族が芋を食べさせましたが、全く満腹感が得られず、逆に下痢を起こし、衰弱がすすんでしまいました。避難していた山から投降するときには骨と皮になるくらいに痩せ

ていました。そのため米軍に病気とみなされ、家族とは別に収容所に連れて行かれました。当時収容所で死ねばそのまま埋められ、帰ることはないということを書いていた平良さんのお姉さん達は、知恵を出し、平良さんに子どもの着物を着せて、MP(憲兵)の監視の目をかいくぐり、収容所の脱出に成功します。こうして平良さんはふるさとに戻ることができました。



当時の着物をもって語る平良さん

### 戦争で 死ねばくちなし 形なし 平和訪れ なんと語るや

恩納村で過酷な戦争体験、自分が命令に従うだけの「あやつり人形」だったことをふりかえり、寄せていただいたメッセージを紹介します。

「平和が訪れど戦争の傷はまだ消えず。年は幾つになろうとも忘れ難く、体験記録として残しえることができたら我幸とす」

沖縄戦から74年、亡くなってしまった人たちにかわって伝えていただいた平良邦雄さんの恩納岳での戦争体験。村民一人ひとりがこの体験から学び、二度と戦争を起さない努力をつづけていくことが大切です。

(瀬戸)